



THE GOSPEL NEWS

在日大韓基督教会
宣教110~120周年
標語

共に生きる
いのちの天幕を
広げよう

1963年9月20日 第3種郵便物認可 (毎月一日発行)

2023年7月1日 (土) 第828号

発行所 福音新聞社 (1部100円)
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3202-5398 info@kccj.jp
発行人/ 中江洋一・編集人/ 金柄 鎬

印刷所 青丘文化社

青年主日
メッセージ

次世代の青年育成は希望の福音

梁陽日長老 (信徒委員長)



青年主日を迎えるにあたり、あらためて教会に集うすべての皆様に次世代信仰継承の重要性を訴えと共に、青少年育成などの働きを共に担っていただきますよう心からお願いしたいと思います。なぜならばそれは青少年の問題ではなく、私たちが在日大韓基督教会の命運を握る大きな宣教的課題であり、神様から与えられた未来展望を開くチャレンジであることを意味するからです。

全国的に少子化や次世代継承が困難な中、青少年の教会離れが年々加速しております。20年前までなら青年会引退後、10年前までは教会学校修了後、そして現在では小学校卒業後に教会離れ現象が起こっていることは危機的です。また30代、40代の若手成人 (若年者) も少なく、教会全体が高齢者で多数占められており、健全な教会運営を進める上でも人材育成は深刻な克服すべき問題であります。

私たちの教会が、今までどれほど真剣に日韓の信仰観の違いを乗り越えて二重文化・言語の共存や後継者育成に尽力してきたのでしょうか。青少年育成を先送りして問題解決できなかった自分たちの無責任さや弱さを真摯に反省し、教会の復活ともいべき起死回生のための行動が今こそ求められます。

特に2020年から始まったコロナウイルス感染という世界的に生命や安全が脅かされる困難に直面して、人々の間に分断が持ち込まれるなど孤立が強まり、私たちの信仰=生きざまが試される時代だと自覚しながら、このような困難な時代だからこそ希望を創り出す教会再生に取り組むことに信仰的意義があることを確信するのです。

私が2021年に信徒委員長に就任した時には、青年会全国協議会 (全協) の活動は停滞しており、5地方会にあった青年会連合会も機能しておらず、全国的に青年会が成立していない現状でした。そのような厳しい現状から始めたことは、教会に踏ん張っている青年たちと出会い、対話しながら信頼関係づくりに向き合うことでした。その中から昨年に全協の役員体制が5名とはいえ整い、活性化に向けた第一歩を踏み始めました。

青年たちが活性化の一環で実施しているのが全国教会訪問であり、3月は関西地方、4月は関東地方、5月は西南地方、6月は中部地方と回っており、7月も西部地方を訪問予定であります。今回の全国5地方・個教会訪問の目的は、全国に散在する青年の掘り起こしであり、8月の全国修養会や11月3日予定の「全協創立60周年記念大会」の参加などの協力や連携をめぐり展開されています。全協が訪問を行うことによって青年

たちとの出会いとつながりを生む機会となり、そこから全協に参与を希望する青年や地方会青年会再結成の機運が高まるなど、着実に活動の効果が生まれています。

特筆すべきは、3月の平野教会ベトナム人青年会との合同讃美礼拝や6月の名古屋南教会を会場にしたブラジル人信徒グループとの交わりです。移住民として厳しい生活を送りながらも、神様と誠実に向き合う姿勢や信仰が生きる力となっている姿に感動させられるなど、青年にとって新しい教会将来像を得た貴重な経験でした。これらは多民族共存や多様性尊重を実現する、21世紀のアンテオケ教会としての役割を發揮する可能性を見出すものであり、青年自身の行動が私たちが在日大韓基督教会のビジョンや未来を創り出す働きを担っていること自体が神様の賜物であることだと確信せずにはいられません。

私は青年たちの必死に自分たちの仲間を探し合っつなごうとする行動を支援しながら、その希望を見出そうとする態度振る舞いから、私たち大人も見習うべきことはたくさんあると感じます。

同時に彼らの地道な取り組みは、まるでイエス・キリストの復活を知らせた若者 (天使) の働きに共通するものを感じます (マルコ福音書16章1節~8節)。イエス様の処刑から3日後にマリアたちが墓に行くと、そこには長い衣を着た若者が座っており、「こう伝えなさい。イエスはあなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて、あなたがたに言われたとおり、そこでお会いできるであろう、と」重要なメッセージを伝えます。

ここで大事なことはガリラヤとは地名を指すのではなく、絶望の中で打ちのめされた人たちの痛み、悲しみが集まる生の現場を象徴するものです。それは現代では悩み苦しむ人たちの生の叫びを受け止めよう、関わろうとする時、現代の復活されたキリストと出会えるという希望ある福音のメッセージなのです。

いま全協の青年たちは、人生や信仰に迷いさまよう仲間たちに寄り添おうとしています。その必死に向き合おう、共に生きようとする姿こそ、聖書にある復活したキリストとの出会い、すなわち生きる喜びとしての福音を実感できることにつながるのです。また、聖書にある若者のように希望を指し示す役割がミッションとして与えられていると言えます。

あらためて全国の教会の皆様には青年たちの支援とお祈りをお願い致します。何よりもその働きが私たち教会の再生や発展を実現する大いなる希望だからです。

韓日対照讃頌歌販売



韓国の新讃頌歌版です。交読文も韓日対照で掲載されています。

- B6版変型・1483ページ
- 価格: 2,500円 (消費税・送料込み)
- ※お求めは總會事務所へ

講壇掛・ストール販売



在日大韓基督教会ではKCCJのロゴ入り講壇掛・ストールを制作・販売しています。価格は講壇掛・ストール共4色セットで各1万円 (約半額) 講壇掛・ストール両方ご購入の場合は1万5千円です。※お求めは總會事務所へ

第55回日本基督教団との 宣教協力委員会開催

去る6月19日(月)日本基督教団(以下UCCJ)と在日大韓基督教会(以下KCCJ)の第55回目の宣教協力委員会が、4年ぶりに対面で東京の日本キリスト教会館UCCJ会議室で行われた。

「両教会の宣教課題と宣教協力～関東大震災朝鮮人虐殺100年を迎えて～」という主題をもって行われた今回の委員会には、UCCJから総会議長の雲然俊美牧師をはじめ10名、KCCJから総会長の中江洋一牧師外8名が参席した。

主題に沿っての講演には大久保正義牧師(西片町教会)が行い、100年前の関東大震災にあった6,000人に及ぶ在日朝鮮人が流言蜚語、すなわち「朝鮮人が放火をした。」「朝鮮人が井戸に毒を入れた」などのでたらめな情報を流され官憲や自警団により虐殺が行われたことを資料に基づいて述べられた。またその講演に対しての応答を金迅野牧師(教育委員長、横須賀教会)が誠意をもっておこなった。

それぞれの教団報告や宣教の課題を分かち合い、その中で1984年2月に締結されたKCCJとUCCJとの「協約」が2024年に40周年を迎えるにあたり、記念行事を準備することが話し合われた。

2023年度の「平和メッセージ」の草案について協議し、それぞれの8月の機関誌に掲載することとした。

また次の日(20日)KCCJ参加者一同は震災時の虐殺の現場



東京第
一教会

姜英珍牧師委任式挙行 献堂式と朴永浩名誉長老推戴式も



2023年6月18日(主日)、東京第一教会においては、姜英珍牧師の委任式と教会堂の献堂式、朴永浩名誉長老推戴式が挙行された。

礼拝は臨時堂会長の鄭有盛牧師が司会を務め、金秉喆牧師(聖山キリスト教会)が「み言葉が益々広まる教会」(使徒6:7)という題目で説教がなされた。

関東地方会長の金容昭牧師の司式でのもで行われた牧師委任式は、紹介、誓約、祈祷後、姜英珍牧師が東京第一教会の担任牧師になったことが宣布された。

引き続き行われた献堂式は、堂会長の姜英珍牧師の司式によって報告、奉献、祈祷、宣言の順に行われた。この度献堂された教会堂は、1995年に建物を売入してから25年余り借金返済が完了し、感動的な献堂式に至った。

長い間本教会を支えて執事、長老として仕えてきた朴永浩名誉長老推戴式も東京第一教会としては感動的で感謝の溢れる推戴式であった。

この度、関東地方会から東京第一教会の牧会を委任された姜英珍牧師は、1962年韓国で生まれ、総神大学神学大学院を卒業し、大韓イエス教長老会(合同)ソウル老会で牧師按手を受けた。姜英珍牧師は過去1999年から2006年に東京第一教会で担任牧師として牧会され、今回は2回目の担任牧師になった。

家族は金有珍夫人と1男と1女がいる。

である旧四つ木橋の荒川河川敷を訪問し、その現場を発掘し、資料・証言などを保存し、追悼をしている団体「ほうせんか」の西崎雅夫氏による現場案内と証言を聴く貴重な時を持った。



仙台教会

馬栄烈牧師委任式挙行 執事按手式、勸士就任式も同時に



2023年6月3日(土)、仙台教会において馬栄烈牧師の委任式と朴廣珍執事按手式、金貞淑勸士就任式が行われた。

礼拝は臨時堂会長張慶泰牧師の司会のもと開会され、説教は本国後援教会の原州中部教会の金徽烈牧師が「福音の働き人」(マルコ16:15)という題名で行われた。

牧師委任式は、関東地方会長の金容昭牧師の司式で行い、紹介、誓約、祈祷後に馬栄烈牧師が仙台教会の担任牧師になったことが宣布された。

引き続き行われた朴廣珍執事按手式と金貞淑勸士就任式は堂会長の馬栄烈牧師の司式によって行われた。

この度、関東地方会から仙台教会での牧会を委任された馬栄烈牧師は、1964年韓国で生まれ、慶北大学、総神大学神学大学院を卒業し、1994年大韓イエス教長老会(合同)大邱中老会で牧師按手を受けた。

家族は韓辰明夫人と2男がいる。

横浜教会

安炳辰長老将立式挙行 李順恵勸士就任式も兼ね



2023年6月25日(主日)関東地方会横浜教会で、安炳辰長老将立式及び、李順恵勸士就任式が盛大に行われた。

堂会長の李明忠牧師の司会で礼拝が始まり、具滋佑牧師(東京希望キリスト教会)が「闇から光へ」(創世記1:1~5)という題で説教を行った。

続いて関東地方会長の金容昭牧師の司式により安炳辰長老の将立式が、紹介、誓約、按手祈祷、宣布の順に行われ、引き続き横浜教会堂会長の李明忠牧師の司式により、李順恵勸士就任式が行われた。

この度、横浜教会の長老に将立された安炳辰長老は、1978年韓国で生まれ、2015年から執事や聖歌隊指揮者として奉仕してきた。

李順恵勸士は、在日2世で、第39回総会期(1987~1989)副総会長を歴任した故・李永欽長老の四女であり、全国教会女性連合会総務の石橋真理恵伝道師の母親である。

福岡教会担任牧師請聘案内

年齢が55歳以下、担任牧会5年以上の牧師

日本語と韓国語の説教ができる牧師

連絡先: 金仁果牧師 (kiminkwa709@gmail.com)

希望の方は、履歴書、説教ファイルを7月30日まで送ってください。

カナダ長老教会定期総会参席 中江洋一総会長が祝辞を述べる

2023年6月4～7日に開催されたカナダ長老教会 (PCC) 第149回定期総会に中江洋一総会長、金柄鎬総幹事、David McIntosh宣教師が参席した。

トロントから1,800Km北東に離れた距離のNova Scotia州Halifaxで開催され、航空便の乗り継ぎに慣れてない一行の遠距離のフライトは困難が伴った。ハリパックスというところは昔から長老教会の神学校があり、カナダから派遣される宣教師たちの出発点であり、とても意味深い地域であった。

今回のPCC総会において新総会長として、珍しくカナダ先住民のMary Fontaine牧師が選出された。開会礼拝前の先住民の歓迎セレモニーや総会長就任式の先住民の儀式や衣装はとても感動的であった。

2日目の午前、中江総会長の挨拶で、「わたしは広島から成田、成田からバンクーバー経由トロントへ、またトロントからハリパックスまでのフライトは大変疲れましたが、100年前にカナダ宣教師たちはこのハリパックスやトロントから列車と船で太平洋を渡り、遠い日本や朝鮮まで来てくださいました。そのことを考えますとただただ感謝の挨拶しかできません」と述べ、また2027年にはPCCからLL Young宣教師が派遣されてから100年を迎える年で、KCCJとしては記念事業を計画していることを伝えた。

挨拶後、KCCJのマークが付いたストールを新総会長の首にお掛けした。KCCJのマークはJohn McIntosh(麦仁道)宣教師がデザインしたことも、またそのデザインの意味もDavid McIntosh宣教師がPCCのみなさんに説明した。

総会参席前の2日間、トロント市のPCC教団本部を訪問し、そこにカナダ合同教会 (UCC) の宣教師のアジア担当Patricia



Talbot総務も加わり報告や交わりの時を持ち、また在日カナダ宣教師の資料館「ビジョン・フェロウシップ(館長：黄煥瑛長老)の訪問、トロントの韓人教会などを訪問し、来年KCCJからトロント留学を予定している2名の教役者の受け入れについて話し合った。

(報告：総幹事 金柄鎬)



牧師免職公告

在日大韓基督教会 中部地方会治理部は、聖書・在日大韓基督教会憲法・規則・戒規・裁判規定・勸懲条例に基づき、教会の神聖と秩序を維持するため慎重に審理した結果、在日大韓基督教会 愛隣伝道所の隠退牧師 趙尚浩を以下のとおり判決する。

<主 文>

被告人 趙尚浩を免職に処する。

2023年4月12日

在日大韓基督教会 中部地方会治理部
部長 崔和植、部員 崔光一 李珍容 李大宗

アメリカ長老教会韓人教会全国 大会に金柄鎬総幹事が参席

2023年5月23～26日、アメリカのシアトルで開催されたNCKPC第52回定期総会及び全国大会に、金柄鎬総幹事が参席し挨拶と交流に加わった。

コロナ禍のために4年ぶりに対面で行った集いは「シアトル兄弟教会」を会場とし、「RESTART、散らされていた者を引き寄せる」(イザヤ11:12) という主題のもとで約200人の総代や准総代、ゲストが集い、事務総会と講演集会、地域リサーチなどの日程で行われた。

事務総会では、前回総会で選出された次期総会長(副総会長)の権ジュン牧師(シアトル兄弟教会)が総会長に、次期総会長としては朴サンチョン牧師(New Jersey所望教会)が選出された。

開会礼拝においてこの一年間召天された方々の追悼のセレモニーに出された召天牧師名簿に、1980年代に浦和伝道所を開拓し、また横須賀教会で牧会された康恩弘牧師の名前があり22年6月に天に召されたことを知った。そして礼拝後、故・康恩弘牧師の長男Jayoung Peter Kang牧師に会い、彼の少年時代に日



本であったことを話したりした。彼は日本で過ごした経験を活かして日系人アメリカ教会の担任牧師として活躍していた。このように日本宣教師の子らが神に遣わされることを実感した。

(報告：総幹事 金柄鎬)

青年会全協

青年交流強化へ各地方訪問

関東、西南を訪問、次は中部・西部を予定

青年会全国協議会(全協)は、青年の教会離れや活動停滞などの危機克服のため、2023年の活動計画の柱を「全協創立60周年記念行事」(11月3日に開催予定)と据えている。青年会活性化の一環で実施するのが全国教会訪問であり、4月は関東地方会(東京、横浜、川崎)、5月は西南地方会(別府)を訪問し、約30名の青年と交流した。

別府教会では礼拝後に2時間ほどのパネルディスカッションが設けられた。青年10人ほどと全協の役員3名とで、信仰生活、就職活動、交際などについて分かち合いをした。大学生の青年が多く、自身が持つタラントをどのように捉え、進路選択につなげるか、具体的な就職活動の取り組み方、などにとりわけ関心が高かった。青年が就職を検討する業界・業種において、個教会単位ではその道のクリスチャンがいなかったことがある。全国単位で各教会の信徒方、全協のOBOGに協力を仰ぐことで、青年がお手本にできるクリスチャン先輩との面談などを開催していきたい。

6月は中部地方会(名古屋)、7月には西部地方会への訪問を予定する。また8月には数年ぶりに対面の修養会開催を準備中である。

全協は役員5名体制の運営で働き手を欲している。全国の諸教会の皆様にはぜひとも全協の取り組みにご理解、ご協力、お祈りをお願いしたい。

(報告：嚴智用 代表)



特別連載 5

1923ジェノサイドの記憶と十字架の信仰(5)

—関東大震災朝鮮人虐殺100周年を迎え—

金性済 牧師(日本キリスト教協議会総幹事)

<5> 虐殺、だれが裁かれたのか

9月1日夕刻から広がった“不逞鮮人”暴動の流言蜚語と朝鮮人虐殺について、政府は3日から徐々に鎮静化させる方向へと方針の転換を始める。

内務省は9月5日に、官憲に極秘資料として「鮮人問題ニ関スル協定」を傳達する。そこでは、朝鮮人暴動は多少あったと証拠の裏付け無しのまま事実とされた上で、虐殺を目撃した朝鮮人の朝鮮半島への渡航阻止、帝国に不利な報道の取り締まりなどが指示される。

自警団の虐殺加担者の検挙は、9月19日から10月末まで行われる。10月には、司法省は、既に臨時震災救護事務局警備部司法委員会が9月11日に決めていた通り、朝鮮人犯罪を既成事実とすることと、自警団員の全員検挙を放棄する方針を固めていた。従って、自警団裁判の顛末とは、「一二件、一二五名の被告中無罪二名、執行猶予九一名、実刑三二名、その内最高刑は四年(二名)」(『法律新聞』1923年12月5日付)という結果に終わり、また実刑被告の多くは翌1924年1月26日、皇太子の結婚の際恩赦を受けている(『大阪朝日新聞』1924年1月27日付)。

つまり、建前上の裁判は行われたが、虐殺に対する司法の正義は最初から放棄されていたのであり、虐殺行為を行ったのは自警団で、内務省、軍、そして官憲はむしろその沈静化に努め、司法による審判はとりあえずとり行ったというストーリーが整えられていった。

なぜこんな信じがたい顛末となるのか。

自警団裁判被告の言いつとは以下のようなものである：「我等自警団員はここに奉公愛國の一念にかられ、九月二日の午後八時から一斉に剣を拵じて警備のために起こったのである」(『報知新聞』1923年10月23日夕刊)。「みな戒厳令下だから、朝鮮人をとらえれば金鶏勳章を貰えると思い込んでいた」「それじゃ話がちがう。戒厳令がしかれたというから、やっちゃったけど。話が違う」(『かくされていた歴史—関東大震災と埼玉の朝鮮人虐殺事件—』関東大震災五十周年朝鮮人犠牲者調査・追悼事業実行委員会編 1974年)。

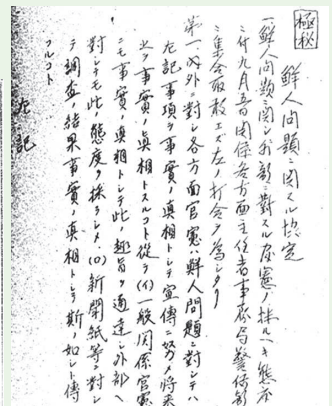
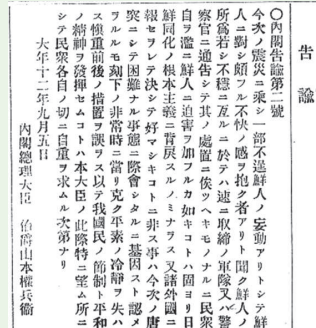
加害者たちの“天下晴れての人殺し”には“皇国を守るため”

という“大義”があり、確かに『教育勅語』には、「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ」(非常事態が発生したならば、義勇の精神をもって自分をささげ永遠の皇国の命運を支えなければならない)と記されている。この大義を果たした民を国家は裁けないという現実。

裁判の始まるころには、関東自警同盟が強力な圧力団体として結成されていて、この圧力を無視して司法の正義を被告たちに貫けば、軍と官憲が行った流言蜚語と虐殺行為が逆にすべて暴かれ、自警同盟によって告発されることになっていたであろう。すなわち、国家責任と民衆責任を不問に伏す国家と民衆の共依存状態という現実が出来上がってしまったのである。

日本の悲劇は、100年たった今も、この歴史と向き合えず、大虐殺の歴史事実を不問に伏し続けていることである。では教会はいずこに。この地に埋められたアベルのような歴史を前にし、キリスト教会はカインに問いかけられた主の御声にどう応えるのか。私たちは歴史の地の底から今も響く泣き叫ぶ声に耳を澄まし、主の問いかけに沈黙せずに応答する福音信仰を見失ってはならない。

「主はカインに言われた。『お前の弟アベルは、どこにいるのか。』カインは答えた。『知りません。わたしは弟の番人でしょうか。』」(創世記4：9)



「鮮人ニ対スル迫害ニ関シ告諭ノ件」 1923(大正12)年9月5日 「鮮人問題ニ関スル協定」(警備部) 1923(大正12)年9月5日

KCCJ 2023年 教役者修養会(zoomによる)

現場の声を聴く～わたしのKCCJの宣教とは？～

日時：2023.7.17 (月・休) 午後1時～4時(参加費無料)

今回の教役者の修養会においては、福音の荒野と言われる日本の現場で孤軍奮闘している4名の牧会者の声を聴きます。4名の方々がすべてを代表するわけではないでしょうが、ふだんなかなか共有することの少ない貴重な現場の声に、耳を傾けてみたいと思います。ご自分の牧会の現場との異なるところ、似ているところなどを確認しながら、感じたこと、考えたことなど、自由に話し合える場にしたいと思います。ぜひご参加ください。

●発題：趙原哲牧師、蔡銀淑牧師、鄭守煥牧師、郭鏞吉牧師

*修養会は韓国語でおこなわれます。またzoomで行われますので、所属教会を記入して kimshinya0327@yahoo.co.jp に送付して下さい。zoomのIDなどを折返しお知らせします。

主催：在日大韓基督教会教育委員会